

会報二月号 易経から学ぶ 序卦伝【上経】2/2

前回の続き。

目次

・上経（十六〜三十）

十六、【雷地豫（らいちよ）】

お互いに謙の徳（他者を重んじ感謝すること、自らを戒めること）を守ることで、自他上下双方ともに喜ぶ。これが【雷地豫（らいちよ）】である。豫とは象の中の最も大きなもの（元）をいう。これ（元）がいつも心の中に喜んで物を害することを嫌う。またそれとても緩やかなものである。それで、ものを急がない。一から二と次第に順序を踏んで静かに行く。緩やかに順序を踏んでいくから物事は成る。そこから、豫とは物事が成って喜び楽しむという義になる。和順悦楽である。雷が鳴っているのを聞いて、雨が降るのを皆が喜んで待っている、皆が生き生きし始めた状態である。また、将来のことに今日から順序立てて運んでいくから「予（あらかじ）め」「備える」という義にもなる。備えがあるから後に事が成って喜び楽しむ所が出てくる。

物事は、迫ってから多くのことを為してはいけない。早くから後のことを考えて、予め何年も前から順序立ててことを運んでいくことが大切である。

豫は「喜ぶ」であり「ゆるやか」であり「備え」であり「順序」である。それで安楽なのである。安楽には必ず君を立て、その君を以てよく万民を養い育てることで天下安楽になる。

十七、【沢雷随（たくらいずい）】

喜び楽しむようになれば、必ず従う者が沢山追随してくる、時節や優れた人に追随する、それが【沢雷随（たくらいずい）】である。随とは、前に向かって勝れた人の後ろについて従うことである。徳のある君主に賢者が従ってこれを助け、また万民がこれに従って協力一致して、その国をますます盛んにしていくことを表している。

人々が喜び楽しむ心を以て集まれば、勝れた人がその集団を率いて、統一と秩序を備え、他者がこれを輔けて大事を興すことになる。

但し、未熟な人に追従してはいけない。また、いつでも従うのではなく、元亨利貞、

仁義礼智という基準に外れてはいけない。

上に立つ者は我儘が利く地位にいますので、順調が続くと心が驕って行いが乱れてくる。すると周囲の人々の心も離反していくことになる。従って、初心を、始めの精神をどこまでも貫いていかななくてはならない。

十八、【山風蠱(さんふうこ)】

成し遂げていく大事、思いがけない出来事、それが【山風蠱(さんふうこ)】である。蠱は事であり、様々な事業のことである。

元々、蠱とは器のようなものが古くなって壊れてきたところを蠱という。そこから物事が壊乱腐敗に陥ったような時を蠱と言ったが、物事が壊乱したら必ずこれを收拾して治めなければならぬ。皆が心を新たに大勇を以て奮起して目的達成のために艱難辛苦を忍び克服し、大事を執行していく事業を蠱と称する。

但し、今までの壊乱腐敗から受けた恩愛を傷つける恐れがあるので、あまりに真正にし過ぎては駄目である。

その業が行われていけば、我が身が大きくなり、人の上に立つようになる。

十九、【地沢臨(ちたくりん)】

そうした努力の結果、大きな結果や地位が得られる。我が身が上にあって下を見るようになる。志・地位・聡明叡智・仁を以て臨む、高い所から下を見る、それが【地沢臨(ちたくりん)】である。臨む(上から下を見る)には、元亨利貞の徳がなくてはいけない。媚び諂(へつら)うような態度で臨んでは通らない。

立派で盛んな時代を築いたことになるが、どんなに理想的な世の中でも、間違った連中が勢力を得ることもある。すると、小人のために人としての働きが阻害されることもある。従って、理想的な時代であっても、絶えず戒めて、決して気を許してはいけない。

※天の徳である「元亨利貞」の四つが全て出てくる卦は【乾为天】【沢雷随】そして【地沢臨】の三つである。元亨利貞：天が物を生じ、物を養っていく働きがどこまでも続いていって、永く衰えないこと。これを天に言えば「春夏秋冬」であり、人に言えば「仁義礼智」である。

※十六、雷地豫↓十七、沢雷随↓十八、山風蠱↓十九、地沢臨までを読めば、事の興る一連の様子が分かる。

二十、【風地觀(ふうちかん)】

そして、物が大きくなったならば、見ても美しく、楽しむことができる。小さなものは見るに足らない。大いに観る、高い所にあつて東西南北四方を広く汎く観廻すること、それが【風地觀(ふうちかん)】である。「視」は常のことを詳(つまび)ら

かに明らかにみることを言う。「観」は、非常、常に非ざる変を見る、何か禍でも出てくるかというような、常に非ざる物を良く見ることである。「観」というのは非常に大切であって、世の中というのはどういふものであるか、また自分は世の中に立つて如何なる仕事・事業をしたら周囲の人の為になるか等を、注意してよく観察するというのが「観」の意味である。

逆に、大勢から見られることも観である。物事の盛んな有り様、物事の大きさが、多くの人たちの目につき、同時に手本となる。見られる方もより張り合いを感じるから、いつそう努力し益々大きな成功が得られる。人に仰ぎ見られるようになれば、事にあたる人の「協力一致」の精神と言うものは堅固になり、心が緩んではならないという心持ちが強くなる。つまり、厳正敬虔の気持ちに失わずに誠心に満ちた態度で示し、また仰ぎ見ることを通る。幼稚・安易な気持ちにならず、己をよく省みて中正を失わないことが大切である。

また、国が盛んになるというのは、君主の努力は当然として、それを輔ける人も誠心が無ければならず、その誠心が言行に現れて、一般国民もこれに協力することになり、そこで初めて国は発展していく。他国にとって手本となるのも、君主をはじめその国の国民の「誠心」が根本を為し、そこに「力量」が加わっていくのである。

## 二十一、【火雷噬嗑（からいぜいごう）】

しかし、大きなものは目立つ。そして、世の中には必ず人に害を与える悪者もいる。こういう状況では、一致団結する力を強くすることが必要である。中間を隔てて裂こうとする害悪は、上下の協力一致で強く噛み切って取り除き、皆の幸福を図る。大改革を一致協力で乗り切って、より盛んへ向かおうとする、これが【火雷噬嗑（からいぜいごう）】である。噬とは噛む、嗑とは合う。噛み砕いて合うことを噬嗑という。口の中にある物を強く噛み切ること、害を加える悪い者を噛み砕くことである。

噛み砕くには、上下の歯が合わさり、十分な力を籠め（注ぎ込むこと）なければならぬ。上はしっかりと真正を固く守ってそし動かさず、下が動いて噛み砕いていく。協力一致とは、自分に与えられた役割と責任を、力を籠めて全うし、自分の為すべき事は、他人に頼らずにこれを成し遂げる覚悟が必要である。そうして初めて困難を打開できる。

志があっても、協力一致の力が弱ければ大事を成就することは容易ではない。共に励まし合って協力一致して邪なものを取り除いて行く事が大切である。

天地の間には必ず悪い者がある。そして悪い者を砕く。どちらも自然の理である。

## 二十二、【山火賁（さんかひ）】

大改革を成就させた後は、山が高く聳（そび）えているのを、下から火が照らしていくように、美しく見せていく。それが【山火賁（さんかひ）】である。賁とは飾る。飾るとは物事が美しくなっていくことである。飾り立て礼を以て整えることである。

初めのうちは創業の際であるから、礼儀も法整備も完備しているものではない。しかし、歳月を経れば、文物と共に徐々に完備されていく。

しかし、創業時には皆が協力一致していても、時間が経てば心は緩むものである。礼儀も法制度も形式や表面ばかりに囚われるようになってその誠心を失いやすい。礼の根本は誠心である。いくら世の中が進歩発展しても、人間の誠心を根本とするのでなければ、弊害が多くなるばかりである。形式や表面を飾ることに偏らないよう、戒めていくことが大切となる。奢（しゃ・贅沢にする）の勢いに任せると、文弱に流れ、文弱に流れてしまつて人々から質素・質実剛健が失われる。これが失われるということは、根本の気概が失われることであり、そうなつては懦弱退廃へと堕ちてしまう。質実剛健・文質頻頻（外面の美しさと内面の質朴さが調和していること）でなければならぬ。もし、質が文に勝るとは、自分の誠心があつてもそれを言葉や形に表すことが拙いようなもので、それでは人に伝わらずに困る。逆に、文が質に勝れば、礼儀も教養も洗練されているが誠心に欠けるところがあるようなものであり、なお困る。

賁とは文質頻頻であり、その美しさを出すことは大切であるが、質（誠心）より勝つてはいけない。質実剛健・質朴を根底に、節度を以て賁していく。

道理を弁え、礼儀を以て整え、お互い親しみ合い、造詣を深めて一致協力して伸びていく。物事が成就した後は文質頻頻でこれを美しく飾っていく。これが文明である。

#### 二十三、【山地剝（さんちはく）】

しかし、「伸びて行けば尽きる」道理がある。行き過ぎれば尽きるし、奢に流れれば懦弱になり衰退するのである。これが【山地剝（さんちはく）】である。剝とは刀を以て削り、段々と害していくことである。物が無くなつていく状態。物窮（きわ）まつて尽きるという意味である。

このような時は新しいことを始めても上手くいかない。己に返つて再起の時を待つて忍ぶ。我が身を全うすることに意を用いる。

このように、たとえ形が整つても、誠心が乏しくなると必ず行き詰まる。しかし、行き詰つたり、尽きたままではいけない。

#### 二十四、【地雷復（ちらいふく）】

上（表面に現れた所）に伸びていき、そこが極まり尽きたならば、下（目に見えない根本）へ帰ってくる。下へ戻つて再度やり直さなければならぬ。本の所へ返る、これが【地雷復（ちらいふく）】である。復とは、元に戻つてやり直すという意味である。天の気が万物を生ずるには、その力が地の底へ来るのでなければならぬ。

#### 二十五、【天雷无妄（てんらいむぼう）】

元に戻れば、人間の本性が力を持つてくるから、本性である誠心を以て人に接して世の中に立ち、協力一致して事に当たるといふ様になる。この誠心誠意という態度が

【天雷无妄（てんらいむぼう）】である。妄（ぼう）とは、望（ぼう）で利己的な欲のこと、正しき道に背くということである。正しき道とは要するに、利己的な欲を忘れて世に立つことである。そもそも人間は孤立すべき存在ではない。互いに敬い合い助け合って行くところに、人生の進歩発展もあるのであって、人間が銘々孤立してしまえば発展もそこで止まってしまし、人生そのものが味気ないものになってしまう。だから、敬い合うこと、助け合うことが本性でなければならぬ。しかし、世の中が複雑になりすぎると、敬い合う助け合うという本性を忘れ、人を押し退けても自分の欲望を達しようとすることになる。この間違いを取り除くのが「无妄」即ち利己心や私利私欲を捨てるということである。お互いに私利私欲を捨てて協力一致して事業を成し遂げれ盛んになれば、銘々がその喜びや利を受け、結局のところ、それが己を全うする道に通ずる。その意味で、己に執着することは己を不幸にする本となる。

无（む）は無の旧字。つまり、无妄（むぼう）とは、利己的な考えを捨てて、誠心を以てする事、天道地理（自然の摂理）を以て行うこと、天より受けた徳（仁義礼智信）を盛んにするという意味である。本性の誠心に戻りさえすれば、卑しい心持ちは無くなっていく。このことを深く考えれば「元（おお）に亨（とおる）。貞（てい）に利（よろ）し」で、天地自然の道がどこまでも発展していくように、人間も進歩発展していく。

人間の心も、人心と道心の二つあることを忘れてはならない。道心であれば、動くに天を以て動く。私欲ではなく良心で動くのである。誠で心を固めて動く。これが无妄である。

## 二十六、【山天大畜（さんてんだいちく）】

誠心を尽くして事に当たれば、必ずその結果は見るべきものが出てくる。その結果、物を蓄えていく事ができる。大いなるものを蓄え養い、あらゆる発展の力がそこに集まってくる状態、それが【山天大畜（さんてんだいちく）】である。大とは、天より我が身に受けたる所の精神・徳（仁義礼智）を言い、畜とは、その大なるものを復（ま）た助けて強く（壮）していくこと。つまり、大畜とはその大なるものを長く留めて（貞）、これを強く養っていくこと。大いに物が蓄えられて豊かな状態をいう。誠心努力の効果は、物が蓄えられるという事実によって教えられ、更に努力を積む事になるから、益々豊かになる。

## 二十七、【山雷頤（さんらいい）】

蓄えれば、そこに実際の力、新しい活動の力が養われてくる。身体を養い徳を養う、これが【山雷頤（さんらいい）】である。頤（い）とは「おとがい」で、ものを噛んで食べて「身体を養う」という意味である。ものを噛むのは下顎が上へ動くのであって、上が下を迎えに行くのではない。

口から入るのは飲食であり、口から出るのは言葉である。言語と飲食を慎み、以

て身体（心と肉体）を養うのである。養うとは、活動するための新しい力が出てくることである。【山天大畜】で蓄えた後、それを【山雷頤】で養うのは自然の流れ（順序）である。

養うことを疎かにして軽々しく動いてはいけない。動いて働くには、働くだけの強い土台がなければ、大した用をなさない。

二十八、【澤風大過（たくふうたいか）】

養うことで大きな力が現れ、勢いが盛んになってくる。これを【澤風大過（たくふうたいか）】という。大過とは大きな力、剛・陽なるものに過ぎること。過ぎるとは現れるという意味であり、大発展の状態である。

事を為す者に弱い人はいない。しかし、強過ぎるのもまた害を生ずる。物事は強過ぎるだけで成し遂げていくものではない。節度を超えればそれは新たな禍への入り口となる。

二十九、【坎為水（かんいすい）・習坎】

強過ぎた結果、傲慢や油断が起これば逆運になって墮ちていく。墮ちていくことで困難に困難が重なって立ち行かないようになった様子、それが【坎為水（かんいすい）】である。坎とは陥るであり、穴である。強過ぎて傲慢や油断の心のまま先へ行けば穴に落ちる。不遇で非常に危険な状態に陥るのである。

しかし、人間は楽をしていると心が緩むけれど、苦しい目に遇うと引き締まった気分になるので、この引き締まった心で困難に処していけば、また新しい機運が開けてくる。要するに、誠心を以てのその努力が続くか続かないかによって未来が決まってくる。

困難に陥った場合には、誠心を変えず、努力を緩めないことが最も大切である。勿論、大抵の場合、尽くした努力が形になってすぐに現れることはまずない。しかし、誠心を以て事に当たった人の心持は、必ず他者が尊重する時が来るものであり、必ずその志を継ぐ者が出てくるのである。なぜなら、その人が仁義の人であると人々が感じるからである。その定まって動かない精神を人々は尊ぶのである。

三十、【離為火（りいか）】

不遇に陥り、どん底まで墮ちれば墮ちたで、辿り着く底がある。ものに着（麗）いで止まる。それが【離為火（りいか）】である。離とは麗（つ）く、並んで行く、ものが揃っていくという意味で、一つのものに周囲のものが取り付くということである。火というものは、燃え上って段々と下から上へ昇っていくものである。燃え上るということは、底まで落ちて衰えた状態がまた段々と戻って盛んになっていくことを表している。

私心を捨て、道心を強くして 優れた人に寄り添い、その人から学び、指導と教訓

を守って坎から脱していくのである。そうして、順境（道理に適う・通る）を開いていくことが道である。

※上経は【乾（天）】【坤（地）】に始まり【坎（水）】【離（火）】の卦で終わる。天地の「働き」で万物が生じ、万物を進歩発展／拡張展開させていくには、日月が運行するところの「働き」で成るものである。

人間生活に於いても、天地の道理（自然の摂理）に則り、最も用をなす水と火と、その他万物の性質と働きを用いて、道理を知り、義を守り、志を立てて自ら行い全うしていくことが、自己の実現と自他の共栄を図ることになる。

※易経の流れを見据えて処していくと、人は自ずから天地の心に近付いてくる。

※【上経】は、天地自然の性質と働きが主であり、来月の【下経】は、人間の営みと処し方が主である。